

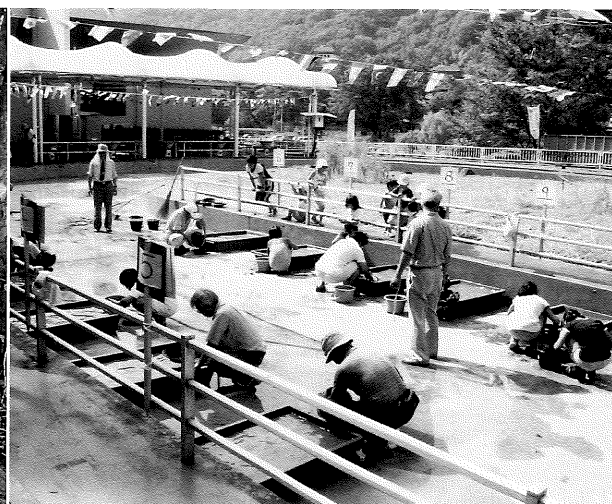
博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



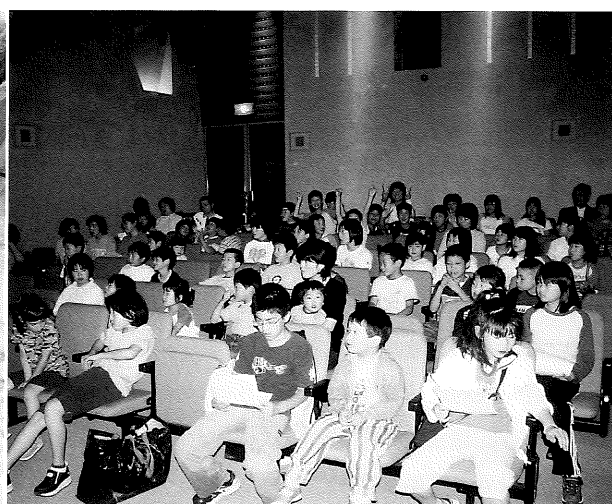
茅小屋金山遺跡見学会



第2回 砂金掘り大会



第2回 こども金山探検隊



親子映画観賞会

新年明けましておめでとうございます

皆様が、晴れやかな気持ちで新年をお迎えしたこととお喜び申し上げます。
博物館では、昨年12月に、開館5年目で有料入館者10万人を達成するという大きな
ニュースもあり、幸先の良いスタートを切ることが出来ました。(関連記事5ページ)

主催事業も滞りなく進み、入館者数も増えています。この調子で新たな1年を乗り切っていく心積
もりでありますので、変わらぬ御指導・御協力をいただけますよう、お願い申し上げます。

世界遺産とは!

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷 口 一 夫

平成14年10月13日の山梨日日新聞3面トップ、また湯之奥金山博物館だより第22号で周知されました『湯之奥金山（甲斐金山）を世界遺産登録へ』は大変な反響を頂き、金山博物館エントランスに設置してありますサイン帳には連日多くの来館者からの記帳が続いています。インターネットのホームページへの記帳も多く、多くの皆様が「世界遺産登録」に関心を持ち、かつ期待していることが分かりました。

町内の方もわざわざ新聞を見て記帳に来館されるなど、支援して下さる多くの皆様の存在が分かり毎日が感動の連続です。

現在のところ民間レベルの運動ですが、この小さな動きが、やがて大きな波動となって日本を動かし、世界に通じる日が来ると確信しています。

ところで「世界遺産って何?」「登録されるとどうなるの?」こんな疑問をもっている方も大勢いると思いますので、世界遺産のことや世界遺産登録の内容を紹介したいと思います。

世界遺産 (The World Heritage) とは

世界遺産とは、世界遺産条約に基づいて、世界的に顕著な普遍的価値をもつ記念工作物、建造物群、遺跡、自然の地域など、国家や民族を超えて未来世代へ引き継いでいくべき、人類共通のかけがえのない自然と文化の遺産を世界遺産リストに登録し保護しているこうというものです。

世界遺産条約は1972年にユネスコのパリ本部で開かれた第17回総会で満場一致で採択された条約で、正式名「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」と言われるものです。

日本における登録は2000年12月現在で11件。このうち文化遺産は法隆寺地域の仏教建造物、姫路城、古都京都の文化財、白河郷・五箇山の合掌造り集落、原爆ドーム、古都奈良の文化財、日光の社寺、琉球王国のウグス及び関連遺跡群、厳島神社の9件。自然遺産は屋久島の2件、白神山地、文化、自然合わせて11件です。

暫定リストに石見銀山など5件

また、向こう5～10年以内に登録するための推薦候補物件について暫定リストの目録が作成されますが、日本では、古都鎌倉の寺院、彦根城、平泉の文化遺産、紀伊山地の霊場と参詣道、石見銀山遺跡の5件がノミネートされています。

現在の登録数は121か国690件

世界遺産は文化遺産、自然遺産、複合遺産に分けられていますが、2000年12月現在「世界遺産リスト」に登録されている件数は121か国690件、内訳は文化遺産が529件、自然遺産が138件、複合遺産が23件となっています。

半数以上の375件が欧州と中南米

世界遺産は原則的には不動産（遺跡）が対象となっていて、動かなければ大きさも、古さも余り問題にならないようです。

特例では「第9」の楽譜が登録されています。また、ブルガリアの「マダラの騎士像」は岸壁の中腹に彫られた一つのレリーフのみを登録した事例もあるようです。

地域的には80年代まで欧州や北米に片寄り、登録遺産の半数以上の375件を占めています。内容的にはキリスト教の教会が際立って多いことが特徴です。

文化遺産の登録基準

登録基準は次の6項目あります。①人類の創造的天才の傑作を表現するもの。②ある期間を通じて、または、ある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。③現存する、または、消滅した文化的伝統、または、文明の、唯一の、または、少なくとも稀な証拠となるもの。④人類の歴史上重要な時代を例証する、ある形式の建造物、建造物群、技術の集積、または、景観の顕著な例。⑤特に回復困難な変化の影響下で損傷されやすい状態にある場合における、ある文化を代表する

伝統的集落、または、土地利用の顕著な例。⑥顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰、または、芸術的、文学的作品と、直接に、または、明白に関連するもの、です。

登録要件は、前記基準の一つ以上を満たしていることと、世界遺産としての価値を将来にわたって継承していくための保護管理措置が担保されていることが要件となります。

注目される甲斐金山遺跡群 湯之奥金山はシンボルの山金山

甲斐金山遺跡は30か所以上が山梨県下に眠っています。学際的総合調査で明らかになった湯之奥中山金山遺跡と塩山市の黒川金山遺跡は西暦1500年代の早い時期に開山、西暦700年代に始まったそれまでの砂金採掘と異なる金鉱石から金を採掘した山金山遺跡、それも日本における山金山の初源的様相をもった甲斐金山遺跡群の代表的遺跡として評価され、甲斐金山遺跡「黒川・中山金山」として国指定史跡に指定されています。

特に湯之奥3金山（中山・内山・茅小屋）遺跡の景観は甲斐金山遺跡のシンボルの存在で、これらを代表する遺跡です。（こうもりやま蝙蝠山写真）

甲斐国における金山から産出された金によって、武田家は碇石金やひるもきん蛭藻金を鑄造、更には日本で最初の貨幣制度を制定、「両・分・朱・糸目」の単位による四進法による金貨を鑄造、流通させました。

この貨幣制度は江戸幕府が開幕されると、そのまま「両・分・朱・文」として継承されるなど、日本における貨幣制度にも大きな影響を与えています。

世界遺産登録基準の②④⑥に該当する遺跡として評価されるものと思われます。

特に1500年代の日本において西日本は島根県石見銀山で代表される産銀活動が行われ、東日本においては東北地方における砂金や甲斐金山遺跡で代表される山金による産金活動が展開され、西国の銀、東国の金が一般的に周知されています。

その西日本の石見銀山が世界遺産登録暫定リストに登録され、5～10年以内に本登録が予定されています。

この事実は、東日本における湯之奥金山・黒川金山を始めとする甲斐金山遺跡群の世界遺産登録の可

能性を示唆するものです。

世界遺産登録実現は甲斐金山遺跡群が人類共通の財産として世界から認められるもので、地域にとっても国にとって大変栄誉なことであり、計り知れないメリットが秘められています。甲斐金山遺跡群の世界遺産登録に多くの皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。



身延方面から見た蝙蝠山

賛同者の皆様からの記帳を頂いています

10月13日から博物館エントランスで世界遺産登録の「夢を共有される方」の署名簿に記帳していただいておりますが、12月7日現在で500人を突破しました。来館者の20%にあたる皆様から記帳していただいております。

内訳は山梨県237名（うち下部町81名）、静岡県84名、東京都48名、神奈川県46名、千葉県16名、愛知県16名、長野県14名、埼玉県12名、京都府5名、群馬県4名、愛媛県4名、大阪府3名、島根県3名、三重県3名、北海道3名、兵庫県2名、滋賀県2名、山口県2名、栃木県1名、熊本県1名、石川県1名、奈良県1名、（22都道府県507名）となっています。

県内では下部町81名、甲府市39名、中富町8名、石和町・御坂町・市川大門町・田富町が各7名、富士吉田市・大月市が各6名、六郷町・身延町が各5名、若草町・白根町・三珠町が各4名、増穂町・竜王町・長坂町・玉穂町・韮崎市・八代町が各3名、河口湖町・八田村・櫛形町・春日居町・一宮町・高根町が各2名、西桂町・豊富村・昭和町・勝沼町・大和村・敷島町・双葉町・中道町・甲西町が各1名となっています。

ミュージシャンの宇崎竜童からも登録に向け応援をいただいております。

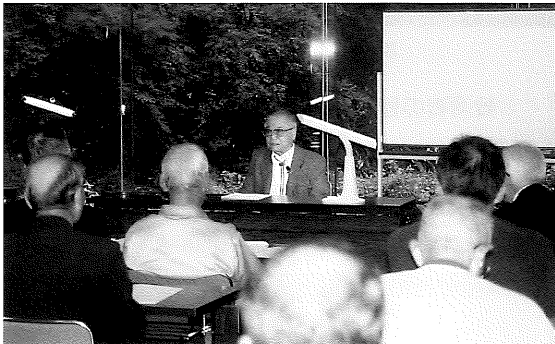
活動報告

平成14年度 公開講座経過報告

かねてから周知していましたが平成14年度公開講座が「甲斐国・河内における金山史研究の歩み」をテーマに、昨年10月から始まっています。

第1回目は山梨県考古学協会名誉会長、野沢昌康先生をお迎えし、「河内の諸金山1～早川町の諸金山～」という演題で御講演いただきました。

野沢先生は早川町内の金山の操業年表や文献などの資料を示しながら、当時の金山の経営形態、周辺の人の暮らしなどを説明されましたが、今年90歳になられるという御高齢でありながら、すばらしい記憶力でお話しくれました。



10月 講演中の野沢先生

翌11月は、「河内の諸金山2～南部・身延・下部の諸金山～」と題して、郷土史研究家の加藤為夫先生をお迎えしました。

加藤先生は、総合調査以前に中山金山へ分け入り、その中で陶磁器類を採集、独自調査を展開してきました。その発掘によって1600年代前半の天目茶碗や、1500年代に作製された祖母懐の茶壺など、金山最盛期に山中で暮らした人々の生活ぶりをうかがわせる重要な資料を収集されました。それらの資料は、学術資料として十分活用されるようにと、博物館建設時に寄贈していただき、現在、当館常設展示室で公



11月 講演中の加藤先生

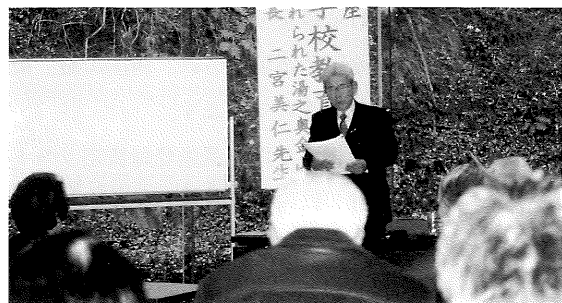
開されていますが、そんな総合調査以前の遺跡の状態も踏まえながらお話しをされました。

12月には元下部町教育長の二宮美仁先生に、「湯之奥金山と学校教育（学校教育に取り入れた湯之奥金山）」と題し、御講演いただきました。

下部中学校で校長の職に就いていた3年間、生徒達に、自身が作った創作劇を演じさせたという二宮先生は、3作品中、その劇の題材に「湯之奥金山」を取り入れたものを創作し、金山衰退期、そこで生活する人々の悲哀を描きました。

二宮先生は、せっかくある地域の歴史遺産を、生徒達に何かの形で伝えていくこと、同時に自分の住んでいる地域を学ぶことを教育現場に携わるものとして、どのように実践していけば良いのか自分自身が模索したこと、そして、本来、小中学校時代に学ぶのが望ましく、また大事であるこれらの事柄が、意外にも、教育現場に携わる者達が見落としがちな部分であることなどをお話されました。

各講座とも町内だけでなく県内外から多くの聴講者においでいただいております。この講演は2月まで開催いたしますので、是非お運びください。



12月 講演中の二宮先生

平成15年

1月18日(土) 穴山梅雪と金山

平山 優氏
(山梨県史編さん室)

2月22日(土) 甲斐金山の歴史

萩原 三雄氏
(帝京大学山梨文化財研究所長)

有料入館者10万人達成！ 開館からこれまで…

年の瀬も押し迫り、何かとせわしい12月、当館では23日(月)の午前、有料入館者10万人目のお客様をお迎えすることが出来ました。

偶然にも幸運に出会ったお客様は、富士宮市にお住まいの有賀照子さんと、孫で高校2年生になる栄理子さん。

チケットを手渡されるなり響いたクラッカーの音に驚いた有賀さん達でしたが、谷口館長から状況説明されると笑顔で納得され、花束と町特産品詰合せ、ホテルのペア無料宿泊券などが贈られました。

谷口館長の案内で館内見学、そして、砂金採り体験を楽しまれました。この日はエントランスに地元新聞社も取材に来ており、インタビューなども受けていました。

「孫とは良く出かけるんです。」という有賀さんと「おばあちゃんが大好きで良く一緒に歩きます。」という栄理子さん。「10万人目は、思いもよらないことで来年が良い年になりそうです。2人で来て良かったです。」と仲良さそうに感想を述べてくれま



した。今回は記念品の他、特別に「下部温泉ペア宿泊券」をご用意させていただきましたが、「これでもまた下部温泉に遊びに来ることが出来ます。その時にはまたこちらに立ち寄らせていただきます。ありがとうございました。」と付け加え、館を後にされました。

平成9年4月の開館から、5年8箇月。これまで多くのお客様に御来館いただき、博物館にとっても、この10万人達成という事柄は更に発展へ向けての大きな大きな節目となります。

湯之奥型石臼（上下セット）を寄託していただきました



この度、下部温泉郷にあります湯元ホテルから「湯之奥型石臼」上下セットを寄託していただきました。

これは、古くから同ホテルで所有、保管されてきたものですが、非常に貴重なものであるため、博物館でより多くの皆さまに見ていただきたいとのことで、博物館に寄託していただいたものです。

現在、博物館エントランスに展示してあります。

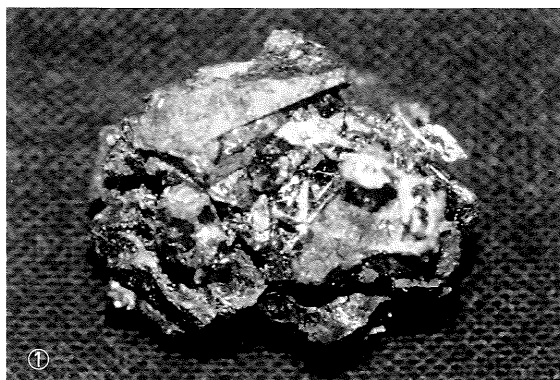
この湯之奥型挽き臼は上臼と下臼が見事に合致した非常に希少な資料です。

親子映画観賞会

地域の子供達に馴染み深くなってきた親子映画観賞会ですが、16回を数える10月の映画会では、「千と千尋の神隠し」を上映しました。12月に予定していた映画会は、この日、関東地方全域、大雪の

恐れありという悪天候のため、やむなく中止としました。

今回は、少し間が開きますが、春休み期間中の3月26日(水)に開催予定ですので、お楽しみに。



金鉍石（糸金）
①～⑤は赤池宗信氏寄贈

『続日本記』に著された、西暦749年、陸奥国における国内初産金の事実は余りにも有名です。この地で砂金が発見されて以来、約800年間、日本における産金は、主に砂金採取によって支えられてきましたが、長きに渡って採取されてきた砂金が枯渇の兆しを見せ始めた中世・戦国期に鉍山という形態が出現しました。

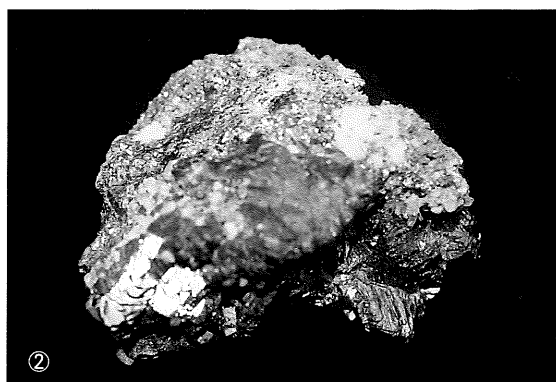
砂金は、地表に露出した金鉍脈が長い年月をかけて風化し雨に流され堆積したもので、自然の力によって、“金鉍石を砕く”作業がすでになされている状態から始まります。しかし山金作業では、この自然の働きがあった部分から手を加えていかなければなりませんでした。

さて、“鉍石”とは「有用な金属などを多く含み、採取することによって利益が得られる鉍物（『大辞林』より）」ですが、その岩石の中に金が多く入っていれば金鉍石、銀が多く入っていれば銀鉍石のように、その中に最も多く含まれている鉍物の名称を冠をつけ、分かりやすく分類されています。そして、その金鉍石が産出する場所を“金鉍床”と呼びます。

湯之奥・中山金山調査区域では、露天掘り採掘跡77箇所、坑道16本が確認されていますが、これらはすべて金鉍石を採掘した跡です。発掘調査はまだされていませんが、現地調査では内山金山でも露天掘り跡が数箇所確認されています。茅小屋金山では採掘跡は明確ではありませんが、廃滓の堆積層が広く確認出来ることから、採掘が盛んに行われていたことが容易に想像できます。

湯之奥3金山で採掘された金鉍石の多くは、山の尾根に露出していたもので、風化作用によって鉍脈中の硫化物（黄鉄鉍）が酸化され黄褐色の水酸化鉄に変わっているため、全体に褐色を呈しています。地表の鉍石が、採掘されたほか、坑道を開いて地表近くの酸化した鉍脈や粘土質の鉍脈も採掘されています。しかし、金鉍石と一口に言っても、含まれている金が見える鉍石はそう簡単にはありません。実際には0.何ミリという、肉眼で見分けるのは困難、もしくは見えないというものがほとんどです。

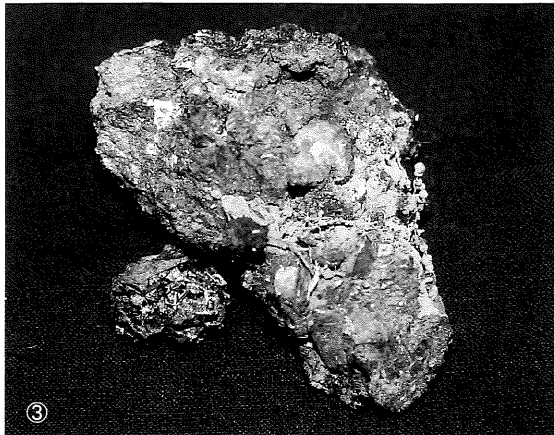
当館資料展示室の鉍石スペースには、各地の金鉍石が展示してありますが、この中に『糸金（秩父鉍山）赤池宗信氏寄贈（釜額在住）』という金鉍石があります。これは非常に貴重で、誰が見ても間違いなく金を確認することができる見事な資料ですが、前述したように金鉍石と呼ばれるものの多くが、その表面に金を見せてはくれません。それもそのはず、金鉍石の品位は1 tの鉍石の中にどれくらいの金が含まれているかによって格付けられますが、現在、世界で一番金を産出しているとされる南アフリカの金鉍石でさえ、平均品位は5 g / 1 tと言われています。それほど希少な金属だからこそ採取にも困難を極め、また今も昔も変わらず、人々に珍重されるのでしょうか。



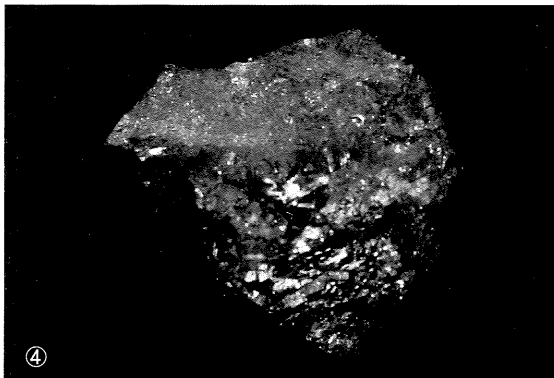
金鉍石（糸金）
違う角度からの撮影

湯之奥金山遺跡の各テラスを観察してみると、金の品位が低かったために採掘されなかった鉍石が地表や坑道に残り、また汰り滓の堆積層も確認されますが、総合学術調査時にこれらの鉍石を分析したところ、鉍石1 tあたりに換算すると、その中に4～

7 gの金と、1～3 gの銀が含まれていることが確認されました。また、別の資料を元九州大学教授井澤氏が分析したところ、金19 g、銀6.5 gが含まれているという分析結果を得ました。分析したものが、かつて金を採取した後に廃棄した鉱石の滓であるわけではありませんが、これらを平均すると、残り滓でさえ、1 tあたり7 gの金と3 gの銀が入っていたのです。



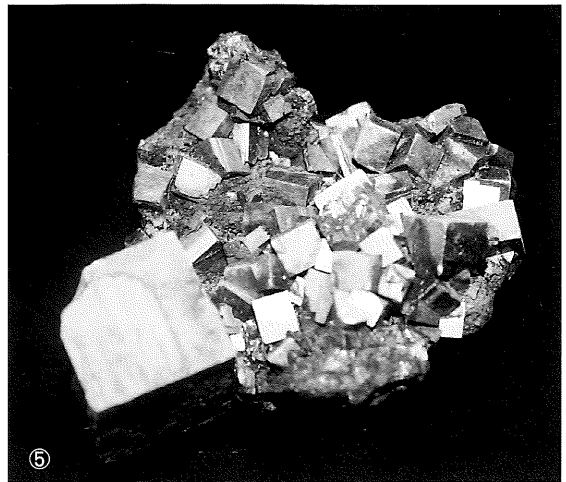
閃亜鉛鉱
黒灰色の石に糸状の金がからんでいる



金鉱石（上記写真、左側を拡大したもの）

湯之奥金山の鉱山技術は、砂金採取から山金採掘へと移行し始め、“鉱山”が形成されて間もない頃のもので、その作業自体に無駄や、非効率な部分もかなりあったと思われます。しかし、湯之奥金山の鉱石を原石として計算した場合、全盛期に採掘された地表付近の風化帯の鉱石には1 t中に数十gから、多い時には100 g、平均品位30 g/t程度の金が含まれていたと考えられ、かなりの高品位であったことを証明しています。

現在、国内で操業されている鹿児島県菱刈鉱山は国内産金量の9割以上を占め、また世界一の金の含有量を誇る鉱山として有名ですが、その平均品位は

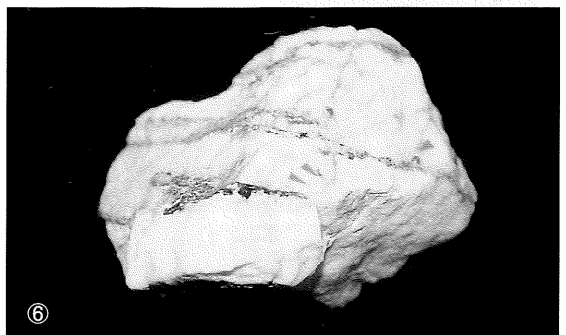


黄鉄鉱
四角く輝く結晶が特徴的。
かつては鉱山夫も金と間違えたという話があるほど。

50～60 g/t、時には数百gからkg単位で入っていたこともあるそうです。

人々は太古の昔から、これらの金を、装飾品に加工したり、財産として保有したり、また現在に至っては工業面でも欠かせず、身近なところでは、日本の人口のうち7人に1人の所持率とされる携帯電話の電子基盤などにも使われており、過日の新聞にも、携帯電話7万台をリサイクルすると1キログラムの金が回収できるという記事が掲載されました。

このように私達は日常、様々な場面で金を利用しています。



金鉱石（茨城県太子町塩沢鉱山）
大森直之氏（東京）寄贈

これまでに知られている地球上で天然に産する鉱物は3,600種を超え、また毎年50以上の新鉱物が発見されています。金を含めたこれらの鉱物はすべて、気の遠くなるような長い時間をかけ自然の力が形成してきたものですが、この金を手に入れるために、多くの人々が払ってきた知恵や技術、そしてその努力には改めて驚かされます。

（学芸員 小松美鈴）

私の研究ノート⑫

「甲斐金山開発」とつながるか？ 「策彦周良」の可能性

湯之奥金山博物館友の会会長 高岡伸五

策彦周良（さくげんしゅうりょう）〔1501～79〕

戦国時代、日明貿易で活躍した禅僧。室町幕府の官領である細川家の家老井上宗信（いのうえむねのぶ）の3男として生まれました。京都鹿苑寺（ろくおんじ）で学んだのち、堺の豪商によって建立された京都天竜寺妙智院（みょうちいん）の第3世住職となります。大内義隆（おおうちよしたか）の要請によって、1539（天文8）年に入明船の副使として、1547（天文16）年には正使として明に渡りました。

私は灰吹き技術の伝来に関心をもち、種々調べていると、神谷寿禎～策彦周良～武田信玄～（甲斐金山開発の可能性）にまでつながってきた。今回はこれについて触れてみたい。



石見銀山

「灰吹き」は「銀吹き」から始まった

『石見銀山旧記（山中家本）』には、「（前略）天文2年、大内復銀山を取かへして、吉田若狭守・飯田石見守に仰せて、銀山を守護しけり。此年、寿禎、博多より宗丹・桂寿と言ものを伴ひ来り、8月5日、相談して、鍾（銀と石と相雜ものを鍾と云）を吹鎚し、銀を成す事を仕出せり。是そ銀山銀吹の始りなり。吹大工は、采女ノ丞・大蔵丞なり。（以下略）」

また「おべに孫右衛門ゑんき（本城家本）」には、一、白銀吹初め候事、天文2年（1533）8月15日、九州博多より慶寿と申禅門参られ、吹申候。

- 一、両大工、周防の山口へ罷下り、御判を申受候。屋形様の御取次、青願殿、吉田若狭守殿、飯田石見守殿。両3人は御奉行之事。
- 一、大工方へ官名を被遺候事、与三右衛門八大蔵丞、吉田又三郎ハ采女ノ丞と御名被下候事。
- 一、銀山御公用参候事、京銭百貫文、但銀ノ百枚。是八年中之御役目相定候事。とあり「石州銀山治府要」にも同様の記事がある。

天文2年（1533）から灰吹き始まる

以上の資料から天文2年（1533）に灰吹きが始まったことは間違いのない事実と思われる。実は、谷口館長から「6世紀後半～8世紀初頭の奈良・飛鳥池遺跡から、ルツボや金銀細工や吹上げた状態の資料が18点余り出土している。これは当時、灰吹き技術があったことを、また技術の高さを裏づけるものであるが、出土状態からその技術は工房内の技術で産銀・産金活動に用いられたものではなかったと思われる。

しかし16世紀の灰吹きは、銀や金の生産活動に直結したもので、飛鳥池の灰吹きとは少し意味合いが違う」という指摘をいただいている。

幾つかの疑問に直面

私は日本へ灰吹法が伝来されたのは「天文2年に博多の豪商神谷寿禎が朝鮮半島から持ち帰った技術」と単純に認識してきたが、少し調べてみると幾つかの疑問が出てきた。

まず神谷寿禎（寿亭）とはどういう人物なのか？朝鮮半島から持ち帰ったというのが、本当にそうなのか？

寿禎が博多から連れてきた宗丹・桂寿の両名は朝鮮半島でなく中国・明国の人とみられるが？

寿禎は銀山で財をなした豪商

まず寿禎について調べてみると「清水寺文書」で

は、大永6年(1526)に石州銀峰山を発見したとある。「石見銀山旧記(山中家本)」でも同様の記述がみられ、詳述されている。「船で雲州へ行く途中、石見の国の海を渡った時、杳南山を望むに、赫然たる光あり、船頭に聞いたら是は石見の銀峰山で昔は銀を出していたが、今は絶えたり。寿亭大いに悦び……。……神谷、三嶋相供に大永6年、3人の穿通子(吉田与三右衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門)を引連れて銀峰山の谷々にて銀を取り、寿亭皆收取り九州に帰りけり。是よりして石見国馬路村の灘、古柳鞍岩の浦へ売船多く来り、銀の鎗を買取て、寿亭が家富、従類広く栄へけり、銀山も又諸国より人多く集りて花の都の如く也」とあり寿亭が銀山で財を成した豪商であることが伺える。

神谷寿禎と策彦周良とのつながり

享禄元年(1528)の「大内義隆記」には「大内義隆の代には、石見銀山の情報が伝わり唐土、天竺、高麗の船が来航する」とあり、中国やインド、朝鮮半島などの船が銀を求めてやってきた。

このような中で寿禎はより効率よく銀を生産するために中国・明から宗丹・桂寿を招き灰吹き技術を取り入れたと考えられる。

寿禎、遣明副使となった策彦周良に酒を贈る

天文10年(1541)7月3日(中国嘉靖20年)「策彦入明記初渡集」に博多の神谷寿禎から遣明副使策彦周良に酒を贈った記録がある。「午後博多船来、神谷寿禎恵以斗合貳個。初喫博多酒。船頭神谷主計允恵斗合一個」である。寿禎と策彦周良の関係を垣間見ることができる。

この遣明使となった策彦周良は、文亀元年(1501)生～天正7年(1579)没。京都に生まれ周良又は謙斎と号した。

天竜寺妙智院住持。天文6年(1537)には副使、天文16年(1547)には正使で二回遣明使として中国へ渡った。後奈良天皇はその労を賞して天下第一僧と称えられている。

策彦周良、恵林寺第33代住職に

武田信玄はこの策彦周良を慕い弘治2年(1556)に恵林寺住持に請じ、禅要を問ひ政道を学んだといわれる(佐藤八郎)。

翌年帰京途中、策彦は河内領下山館にたち寄り、南松院夫人(信玄の姉・穴山信友(梅雪)の妻・信君(幼名勝千代)の母に「葵庵理誠」の法号を与えた。後に信君に請われ駿河の江尻城天守閣に「観国楼」の額を揮号している。

【恵林寺歴代住職】

代氏名	記事	代氏名	記事
① 夢窓疎石	1330開山	⑤ 希庵玄密	1572没
② 満翁大道		⑥ 快川紹喜	1582没70歳
③ 曇翁 瞿		⑦ 末宗瑞蜀	1609没75歳
④ 無元		⑧ 鼎州恵扛	1646没87歳
⑤ 省哲		⑨ 龜山周潜	1655没60歳
⑥ 端昭		⑩ 峻岩玄卓	1677没68歳
⑦ 古先印元	1374没80歳	⑪ 荊山玄紹	1693没61歳
⑧ 明叟齊哲	1347没	⑫ 東法純季	1722没59歳
⑨ 青山慈永	1369没68歳	⑬ 大伽道癡	1743没64歳
⑩ 龜湫周沢	1388没81歳	⑭ 泰元梵修	(不明)52歳
⑪ 絶海中津	1405没70歳	⑮ 古林義弼	1778没64歳
⑫ 通叟宏感		⑯ 喝門桓三	1800没55歳
⑬ 曇芳周応	応永年間没	⑰ 悦山楚欽	1814没88歳
⑭ ⑳不明		⑱ 義堂玄理	1824没71歳
⑰ 惟高妙安	1567没88歳	⑲ 延陵丕珣	1830没57歳
⑱ 明叔慶俊	1552没	⑳ 藍田宗蜀	1859没
⑲ 鳳栖玄梁		㉑ 円応契梁	1890没72歳
⑳ 月航玄津	1586没92歳	㉒ 蓬川元魯	1916没75歳
㉑ 天桂玄長		㉓ 宝岳慈興	1941没67歳
㉒ 快川紹喜		㉔ 一舟慈棹	
㉓ 策彦周良	1579没79歳	㉕ 会元文堂	1982没83歳
㉔ (不明)		㉖ 南條大亨	(現在)

〈佐藤 八郎〉

策彦周良、甲斐金山開発に関係か？

策彦周良は甲斐国恵林寺の33代住職として名を残しその足跡が知られるが、石見銀山の発見、開発に力をなした神谷寿禎との関係、特に策彦が明へ行く4年前に明から禅門にいる宗丹・桂寿の両名を招いている寿禎から、事前に色々な明国の情報を得ていたことも予測できる。また明国で得た最新の鉱山技術などを武田家や河内領の穴山家に伝える機会は十分にあったと思われる。

甲斐金山など武田領域内における金山開発の技術、黒川金山にみられる灰吹に使われた「ルツボ」の存在は、神谷寿禎と策彦周良の接点からのそのルーツを見い出すことができる。

また河内領における中山金山・内山金山・茅小屋金山など湯之奥3金山や早川諸金山の開発にも策彦周良がもたらした鉱山技術情報が背景にあった可能性は高い。牧田諦亮「策彦入明の研究」といった策彦の研究書なども沢山あり、甲斐金山開発にメスを入れる研究に発展することを期待したい。

館からのお知らせ

奥山氏寄託の「甲州金」をいよいよ展示公開へ

かねてから多くの皆様に熱望されておりました奥山源栄氏寄託の「甲州金」展示公開ですが、いよいよ展示改修工事が着工されました。

2月の下旬には、工事も完了し来館される多くの皆さまに御覧いただけることとなります。

公開講座のお知らせ

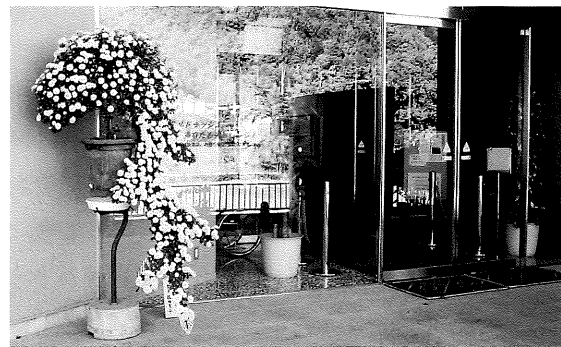
平成14年度 湯之奥金山博物館公開講座
河内地方の諸金山
～ 甲斐国・河内における金山史研究の歩み～

通算回	期 日	演 題	講 師 名
第29回	平成15年 1月18日(土)	穴山梅雪と金山 (文献からみた穴山氏と金山)	山梨県史編さん室 平 山 優
第30回	2月22日(土)	甲斐金山の展望 (金山史研究の現状と将来)	帝京大学山梨文化財研究所 所 長 萩 原 三 雄

菊の花たより

10月、まさに菊の季節に、博物館入口に美しい花を飾りました。町内常葉在住の依田良平さんの御好意によるもので、手間隙かけて咲かせた見事な菊の花を、毎年この時期に展示していただいています。

今年のテーマは「輝 (静岡型作り)」。自然の中でも花がだんだん少なくなってきて物寂しくなってくるこの季節、その名のとおり、美しい鮮やかな黄色の花が来館者の目と心を楽しませてくれました。



編集後記

さあ、2003年の幕開けです。

2002年は、博物館でもいろんなことがありました。公開講座などの例年事業の開催はもちろんのこと、金貨寄託 (現在公開準備中)、世界砂金掘り大会1位獲得、世界遺産登録への運動開始など、博物館を

中心とした明るい話題も豊富でした。

新年に掲げる抱負は、これまでと同様、「積み重ねを大事に更なる飛躍をめざし、最善の努力、そしてより愛される博物館作りに向かって邁進していくこと。」毎年変り映えしないようにも感じますが、職員全員、この心構えが一番大事だと思っていますので、今年もよろしくお願ひ申し上げます。

博物館だより

第23号
平成15年1月10日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015
FAX 0556 (36) 0003

博物館ホームページアドレス <http://www.2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/>

博物館Eメールアドレス kinzan@town.shimobe.yamanashi.jp